

加藤好郎・木島史雄・山本昭編

書物の文化史

——メディアの変遷と知の枠組み

〈丸善出版、二〇一八年四月、二一〇頁〉

紙の本は、いつまで存在できるのだろうか？ そんなことは、子供の頃には考えたことすらなかった。レイ・ブラッドベリの古典的SF作品である『華氏451度』では、あらゆる情報が映像や音で表現、あるいは伝達されるようになり、本というものの所持が暴力的に禁じられた未来世界が舞台となっていた。そうした状況に抗する人々一人ひとりが人類の知的財産を暗唱するという営為に身を捧げるところで終わっていた。ある者は「コーサー」を、ある者は「シェークスピア」を、というように。恐ろしく、そして美しい精神が描かれた作品であった。トリュフォーによる映画もまた、美しくも恐ろしい印象が残っている。華氏451度とはほぼ撰氏233度にあたり、紙が自然発火する

温度とのことである。

人類がその知的活動を記録し、次の世代に伝達してきたことによって現在の世界が作られていることに異存がある者は恐らくいないであろう。しかし、メディアの変化が情報の中味にも変容を強いることもまた、ありうるのではないだろうか。本書の「まえがき」は、「単なる『書籍史』を超えて、広く書物と人間の関わりをとらえることを目指しています」と始まる。本書の体裁についても「現代日本人にとってなじみのもの」である活字形式・冊子体・A5判・挿図多数をとっている。いわば紙の本の、ことによると最終的な形態になるかも知れぬ体裁をとっている。そこで展開されているのは、「書物」という言葉で語られてきた情報伝達メディアの足取りである。従って本書が目指したものは、共同作業を通じて、「本」というものの歴史的総括になるのかも知れない。

内容は、東洋・日本・オリエント・西洋の書物史に近現代メディア史など

からなり、地域区分はともあれ、中島の『文字禍』の世界である粘土板、紙の実用化と低廉化、筆写から印刷への展開、活字の発明などが具体的に、時に挿図としての図版を使って分かりやすく説明される。さらに、書物のデータベース化、デジタル化の展望が記される。また、非文字資料としての音と画像・映像が日進月歩するメディアによって扱いと受け止め方が変化してきたことが語られる。これは、日本におけるオペラの普及がレーザーディスク以降であり、DVDの普及によって一挙に加速したことから考えてもよく理解できる事柄であろう。

総じて、入門書の体裁をとり、肩の凝らないコラムを各所に入れるなど、読者を飽きさせない工夫が各所に見られる。多少なりとも「書物」や「メディア」に関心がある者であれば、拾い読みをしながら結局全部に目を通すことになるのではないだろうか。それはそれで、「読書」の楽しみであろう。

(三好章)